

釜石調査の40年

田野崎 昭 夫 (中央大学名誉教授)

釜石社会の調査のきっかけは、新明正道先生の町村合併を契機とする調査でのスタッフの1人として参加したことである。当時釜石市長は新明先生の恩師吉野作造に師事した鈴木東民氏、釜石製鉄所長は先生の東大新人会の後輩佐山励一氏であった。この1958年の釜石調査は「産業都市の構造分析」として『社会学研究』17号に発表された。

その後中央大学に就任したがやがて大学紛争が全国的にまた国際的に拡大した。その頃中央大学は八王子に、東北大学も川内青葉山へ移転するが、その際廃棄寸前の1958年釜石調査の資料を引き取って、20年後の78年に釜石調査を科学研究費の助成を受けて実施することができた。その際、58年調査回答者で釜石在住者にパネル調査も実施した。その成果は田野崎編『企業合理化と地方都市——釜石市における対応と展開』（東京大学出版会、1985年）として刊行された。

さらに20年後の1998年に第3次の釜石調査を行ったが、成果は、私が定年退職したため、編集責任者田野崎『地域社会の変動と社会計画——釜石社会と釜石製鉄所』中央大学社会科学研究所研究報告25号（2007年、非売品）として刊行された。なお、第3次調査でも、第2次での市民意識調査の回答者に同様のパネル調査を実施した。

釜石は一定の地域社会において製鉄業が中心産業として展開してきたが、第2次調査の時期に高炉休止、鉄鉱山閉山の方向が明確化された。第3次調査では製鉄所が線材生産の複合事業所となった地域社会の変動が追究された。この間、単一産業が圧倒的な都市・釜石と対照的な複数主要産業が展開する都市として、繊維工業、楽器産業、車両産業の浜松市を調査して、田野崎編『現代都市と産業変動——複合型産業都市浜松とテクノポリス』（恒星社厚生閣、1989年）を刊行した。

同一地域社会を再度訪れ調査した研究は国際的

にもいくつかあるが、等年間隔で3回にわたって住民意識調査を実施し、しかもパネル調査を行っている社会学的研究は国際的にも聞いていない。ただ、パネル調査の間隔が20年は長すぎるという批評はあるが、世界的な大学紛争という事情の介在のためである。実は、1978年のパネル調査対象者に、往復はがきで58年の調査の記憶などについて質問したら約半数の回答があり、明確に記憶している回答はわずか1名で病院の看護師だった。このことはかえって、このパネル調査が前回の自己の回答をひきずらないで現況に即して回答しているという意味がある。

第3次調査で著しく変わってきた点は、市民意識の調査対象者に不在が増加して、女性の場合もパートタイマーで出勤していることである。調査員も女子学生がふえて訪問調査に制約をうけ調査効率も伸びなやんだ。調査スタッフの女性も子育て期にあり、調査中に保育園に預かってもらった。身重だが安定期にある院生にも参加してもらった。このような地域社会の現地総合調査の実施もおそらく社会学界でははじめてかもしれない。

最後に。これらの3次にわたる釜石調査の資料は「釜石社会調査田野崎資料」として釜石市に寄託し将来寄贈される。現在は、産業振興課の管理下で釜石市図書館に所蔵されている。幸い東日本大震災では無事であった。今後の釜石社会の調査は、今のところ東京大学社会科学研究所の「希望学・釜石調査」が試みており、ある程度の継続性を見ることが出来る。

なお、浜松市の調査資料は浜松市に寄贈した。しかし、そのあと全国の市町村を対象に郵送調査した「地域計画と住民生活に関する調査」の成果は、田野崎編『地域社会計画の研究』（学文社、1996年）として刊行されたが、原資料は引き受け手がなく廃棄処分されたのは大変残念である。

調査地でのセクシュアル・ハラスメント

丸山 里美 (立命館大学産業社会学部准教授)

私のはじめての調査は、苦い経験で終わった。社会学の学徒となった学部3年生から、私は大阪市西成区の釜ヶ崎地域で行われていた炊き出しをフィールドに、ボランティアについての調査をはじめた。私自身も毎週そこへボランティアとして参加し、出会うさまざまな立場の人に動機をたずねるといふ素朴な調査は、多くの人の温かさに助けられ、大学院進学を決意するほど充実した時間になった。

しかしそこで私を悩ませたのが、調査者対象者となる男性との関係である。たとえば私は、親しくなった1人の日雇労働者から、ラブレターをもらった。すぐにお断りをしたのだが、彼はそれを恨みに思い、いくつかの行き違いも重なって、私を「殺してやる」と言うようになった。それは卒業論文を提出する少し前のことだった。彼の生活の場でもあった炊き出し主催団体に相談をすることは、家も職も失ってとりついた釜ヶ崎でやり直そうとしていた彼の生活を壊すことになりかねない。指導教官は男性で、とても相談できる雰囲気ではなかった。それでも大学院進学のためには、卒業論文だけは完成させなければならない。そう考えた私は、恐々フィールドに足を運び、お世話になった方々へ書きあげた論文を見せ、それから逃げるようにして調査地を去った。3年間毎週のように通い、その後も訪れたいと思っていた大事なフィールドをそのような形で去らなければならない。私ははじめての調査に失敗したという挫折感でいっぱいだった。その後しばらく、男性の大きな声が聞こえると、彼が来たのではないかと体が震えるようになった。

自分が軽率すぎたのだろう、調査者として能力がなかったのだろう。自分を責め続ける日々なかで、同様の経験をしたホームレス支援に関わる女性たちに出会った。そこで私は、それが自分1

人だけの経験ではないと知り、「あなたは悪くない」と言われて心底安堵したのだが、しかし私は他の女性たちと違って、支援活動だけではなく調査をしていた。調査とは基本的に搾取的な行為であるという後ろめたさゆえに、私は長く自分の経験をハラスメントと位置づけることができず、女性支援者たちとのつながりは、力になると同時に孤立感を深めることにもなった。

調査が被調査者にとって基本的に迷惑な行為であり、搾取や支配にならないよう配慮しなければならないという認識は、いまやあたりまえのものになっている。最近では調査倫理も定められ、社会調査協会の倫理規定のなかには、調査者は「性的な言動や行動」について配慮しなければならないと言及されている。しかし逆に調査者が被害にあうという可能性は想定されているだろうか。大学に設置されているハラスメント相談窓口でも、学外者が相手方となると具体的な対応は難しく、相談に応じる体制があるのか明確ではないところも多い。しかし特に大学院生にとっては、調査地でのハラスメントは、研究継続の可否にも関わる重大な問題であろう。

調査倫理に配慮しようとすればするほど、調査者は弱い立場に立たされることになり、そのことがハラスメントを誘発する可能性もまた、考慮されてもいいのではないだろうか。もちろんだからといって、調査という行為のもつ暴力性がなくなるわけではないが、それらは別個の問題として整理することが可能だろう。ハラスメントは、調査者個人の調査態度や能力、パーソナリティの問題に帰されるべきではないのである。調査地でハラスメントを受けた経験をもつのは、私1人ではないはずである。調査倫理とともに、調査者の安全を守るための方途などもまた、議論されていくことを願う。